

骨董

幸田露伴

青空文庫

骨董こつとうというのは元来支那しなの田舎言葉で、字はただその音おんを表わしているのみであるから、骨の字にも董の字にもかかわった義があるのではない。そこで、汨董と書かれることもあり、また古董と書かれることもある。字を仮りて音を伝えたまでであることは明らかだ。さてしかし骨董という音がどうして古物こぶつの義になるかという、骨董は古銅こどうの音おんてん転である、という説がある。その説に従えば、骨董は初はじめは古銅器を指したもので、後に至って玉石の器や書画の類まで、すべて古いものを称することになったのである。なるほど韓駒かんくの詩の、「言う莫なかれ衲子のうしの籃らんに底無しと、江南こうなんの骨董を盛り取もり取って帰る」などという句を引いて講釈され

ると、そうかとも思われる。江南には銅器が多いからである。しかし骨董は果して古銅から来た語だろうか、聊いささか疑わしい。もし真しんに古銅からの音転なら、少しは骨董という語を用いる時に古銅という字が用いられることがありそうなものなのに、汨董だの古董だのという字がわざわざ代用されることがあつても、古銅という字は用いられていない。の古物をもいうことになつたのである。骨董は古銅の音転などという解は、本を知らずして末に就いて巧解こうかいしたもので、少し手取り早過ぎた似而非解えせ釈せという訳になる。

また、蘇東坡そとうばが種しゅの食物を雜まじえ煮にて、これを骨董羹こつとうかんといつた。その骨董は零雜れいざつの義で、あたかも我邦わがほう俗ぞくのゴツタ煮ゴツ

夕汁などというゴツタの意味に当る。それも字面じめんには別に義があるのではない。また、水に落つる声を骨董ひびきという。それもコトンと落ちる響ひびきを骨董の字音を仮りて現わしたまでで、字面に何の義もあるのではない。畢ひつきよう 竟 骨董はいずれも文字国の支那の文字であるが、文字の義からの文字ではなく、言語の音からの文字であつて、文字は仮りものであるから、それに訓詁的のむずかしい理屈はない。

そんな事はどうでもいいが、とにかくに骨董ということたつとは、貴いものは周鼎しゆうてい漢彝かんい玉器ぎよくきの類から、下つては竹木雜器に至るまでの間、書画ほうじよう法帖ほうじよう、琴劍鏡硯きんけんきようけん、陶磁とうじの類、何でも彼かでも古い物一切をいうことになつてゐる。そして世におのずから骨董

の好きな人があるので、骨董を売買するいわゆる骨董屋を生じ、骨董の目ききをする人、即ち鑑定家も出来、大は博物館、美術館から、小は古郵便券、マツチの貼紙の蒐集家まで、骨董畠が世界各国都鄙^{とひ}到るところに開かれて存在しているようになっていゝ。実におもしろい事で、また盛んなことで、有難い事で、意義ある事である。悪口をいえば骨董は死人の手垢^{てあか}の附いた物といふことで、余り心持の好いわけの物でもなく、大博物館だつて盜賊^{どろぼう}の手柄くらべを見るようなものだが、そんな阿房^{あほ}げた論をして見たところで、野暮^{はなし}な談で世間に通用しない。骨董が重んぜられ、骨董蒐集が行われるお蔭で、世界の文明史が血肉を具し脈絡が知れるに至るのであり、今までの光輝^{そう}がわが曹の頭上にかがやき、香

気が我らの胸に逼せまつて、そして今こんじん人をして古文明を味わわしめ、それからまた古人とは異なつた文明を開拓させるに至るのである。食欲色欲ばかりで生きている人間は、まだ犬猫なみの人間で、それらに満足し、若もしくはそれらを超越すれば、是非とも人間は骨董好きになる。いわば骨董が好きになつて、やつと人間並なみになつたので、豚だの牛だのは骨董を捻ひねくつた例を見せていない。骨董を捻ひねくり出すのは趣味性が長じて来たのである。それからまた骨董は証拠物件である。で、学者も学問の種類によつては、学問が深くなれば是非骨董の世界に頭を突つ込み手を突つ込むようになる。イヤでも黴かびくさ臭いものを捻ひねくらなければ、いつも定きまりきつた書物の中をウロツイている訳になるから、美術だの、歴史だの、文芸

だの、その他いろいろの分科の学者たちも、ありふれた事は一通り知り尽して終つた段になると、いつか知らぬ間に研究が骨董的に入つて行く。それも道理千万な談で、早い譬が、誤植だらけの活版本でいくら万葉集を研究したからとて、眞の研究が成立とう訳はない理屈だから、どうも学科によつては骨董的になるのがホントで、ならぬのがウソか横着かだ。マアこんな意味合もあつて、骨董は誠に貴ぶべし、骨董好きになるのはむしろ誇るべし、骨董を捻くる度にも至らぬ人間は犬猫牛豚同様、誠にハヤ未発達の慙むべきものであるといつてもよいのである。で、紳士たる以上はせめてムダ金の拾万両も棄てて、小町の眞筆のあなめあなめの歌、孔子様の讚が金で書いてある顔回の瓢、耶蘇の血が染みている

十字架の切れ端などというものを買込んで、どんなものだいと反そ身りみになるのもマンザラ悪くはあるまいかも知らぬ。

骨董いじりは実にオツである、イキである、おもしろいに違ちがない、高尚に違ちがいない、そして有意義に違ちがいない、そして場合によつては個人のため社会のためになる事もあるに違ちがいない。自分なぞも資産家でさえあればきつとすばらしい贖がんぶつ物や贖かいこ筆を買かい込こ込こんで大ニコニコであるに疑ういがない。骨董を買かい以上は贖がんぶつ物を買かい、うまいなんぞというそんなケチな事でどうなるものか、古人も死し馬ばの骨を千金で買かいとさえいつてあるではないか。仇きゅう十州じゅうしゅうの贖およ筆は凡およそ二十階級ぐらいあるという談はなしだが、して見れば二十度贖およ筆を買かいさえすれば卒業して真筆が手に入るのだから、何の

訳はないことだ。何だつて月謝を出さなければ物事はおぼえられない。贋物贋筆を買うのは月謝を出すのだから、少しも不当の事ではない。さて月謝を沢山出した挙句に、いよいよ真物真筆を大金で買う。嬉しいに違いない、自慢をしてもよいに違いない。嬉しがる、自慢をする。その大金は喜悅税だ、高慢税だ。大金といったつて、十円の蝦蟇口から一円出すのはその人に取つて大金だが、千万円の弗箱ドルから一万円出したつて五万円出したつて、比例をして見ればその人に取つて実は大金ではない、些少さしょうの喜悅税、高慢税というべきものだ。そしてその高慢税は所得税などと違つて、政府へ納められて盗賊どろぼう役人だかも知れない役人の月給などになるのではなく、直すぐに骨董屋さんへ廻つて世間に流通する

のであるから、手取早く世間の融通を助けて、いくらか景氣をよくしているのである。野暮でない、洒落切った税というもので、いやいや出す税や、督促を食った末に女房にようぼの帯を質屋へたたき込んで出す税とは訳が違ふ金なのだから、同じ税でも所得税などは、道成寺どうじやうじではないが、かねに恨うらみが数ござる、思えばこのかね恨うらみめしやの税で、こつちの高慢税の如きは、金と花火は飛出す時光る、花火のように美しい勢いきおいの好い税で、出す方も、ソレ五万両、やすいものだ、と欣 《にこにこ》として投出なげだす、受取る方も、ハツ五万円、先ずこれ位のものをお納めして置きますれば私わたくしも鼻が高うございますると欣 《にこにこ》して受取る。悪い心持のする景色ではあるまい。誰だつて高慢税は出したかろうでは

ないか。自分も高慢税は沢山出したい。が、不埒ふらちせんばん千万、人生五十年過ぎてもまだ滞納とは怪けしからぬものだ。

この高慢税を納めさせることをチャンと合点がてんしていたのは豊とよと

臣みひでよし秀吉で、何といつても洒落しやれた人だ。東ひがしやま山時やまとき分ぶんから高慢

税を出すことが行われ出したが、初めは銀閣金閣の主人みずから税を出していたのだ。まことに殊勝の心がけの人だった。信長のぶなが

の時になると、もう信長は臣下の手柄勲功を高慢税額に引直ひきなして、いわゆる骨董を有難く頂戴ひきなさせている。羽柴はしばちくぜんのかみ筑前守ちくぜんのかみなど

も戦いくさをして手柄を立てる、その勲功の報酬の一部として茶器を頂戴している。つまり五万両なら五万両に相当する勲功を立てた時に、五万両の代りに茶器を載のせているのである。その骨董に当時

五万両の価値があれば、そういう骨董を頂戴したのはつまり筑前守は五万両の高慢税を出して喜んでそれを買ったのと同じことである。秀吉が筑前守時代に数の茶器を信長から勲功の賞として貰もらったことを記している手紙を自分の知人が持っている。専門の史家の鑑定に抛よれば疑うべくもないものだ。で、高慢税を払わせる発明者は秀吉ではなくて、信長の方が先輩であると考えらるるのであるが、大おおにその税法を広行したのは秀吉である。秀吉の智謀威力で天下は大分明るくなり安らかになった。東山以来の積勢で茶事は非常に盛んになった。茶道にも機運というものでがなあらう、英えい靈れい底ていの漢かん子しが段だんに出て来た。松まつ永なが弾だん正じょうでも織田信長でも、風流もなきにあらず、余裕もあつた人であるから、皆

茶ちやえん謙を喜んだ。しかし大おおあお煽りに煽つたのは秀吉であつた。奥

州武士の伊達政宗が罪を堂どうヶ島しまに待つ間にさえ茶事を学んだほど、

茶事は行われたのである。勿もちろん論秀吉は小田原陣にも茶道宗匠を

随したがえていたほどである。南方外国や支那から、おもしろい器物を

取寄せたり、また古こわたり渡の物、在来の物をも珍重したりして、お

もしろい、味のあるものを大おおに尊おおいんだ。骨董は非常いきおいの勢をもつて

世に尊重され出した。勿論おもしろくないものや、味のないもの

や、平凡のものを持もて嘸はやしたのではない。人をしてなるほどと首し

肯ゆこう点頭せしむるに足るだけの骨董を珍重したのである。食色

の慾は限りがある、またそれは劣等の慾、牛や豚も通有する慾で

ある。人間はそれだけでは済まぬ。食色の慾が足り、少しの閑暇

があり、利益や権力の慾火は断えず燃ゆるにしてもそれが世態漸く安固ならんとする傾かたむきを示して来て、そうむやみに修羅心しゅらしんに任せてが寄つてたかつて競り上げた。北野きたのの大茶おおちやの湯ゆなんて、馬鹿氣たことでもなく、不風流の事でもないか知らぬが、一方から観れば天下を茶の煙りに巻いて、大煽りに煽つたもので、高慢競争をさせたようなものだ。さてまた当時において秀吉の威光を背後まげに負いて、目眩まぼゆいほどに光り輝いたものは千利休せんりのきゆうであった。勿論利休は不世出の英靈漢である。兵政の世界において秀吉が不世出の人であつたと同様に、趣味の世界においては先ずもつ以て最高位に立つべき不世出の人であつた。足利あしかが以来の趣味はこの人によつて水際みづぎわだ立つて進歩させられたのである。その脳力も眼

力も腕力も尋常一様の人ではない。利休以外にも英俊は存在したが、少は差があつても、皆大体においては利休と相呼応し相追隨した人であつて、利休は衆星の中に月の如く輝き、群魚を率いる先頭魚となつて悠然としていたのである。秀吉が利休を寵用したのはさすが秀吉である。足利氏の時にも相阿弥そうあみその他の人、利休と同じような身分の人 はあつても、利休ほどの人もなく、また利休が用いられたほどに用いられた人もなく、また利休ほどに一世の趣味を動かして向上進歩せしめた人もない。利休は実てんせん天てんせん仙の才である。自分なぞはいわゆる茶の湯者流の儀礼などは塵ちりばかりも知らぬ者であるけれども、利休がわが邦くにの趣味の世界に与えた恩沢は今いたつに至いたつてなお存して、自分らにも加被かひしているこ

とを感じているものである。かほどの利休を秀吉が用いたのは実にさすがに秀吉である。利休は当時において言わず語らずの間に高慢税査定者とされたのである。

利休が佳かなりとした物を世人は佳なりとした。利休がおもしろいとし、貴しとした物を、世人はおもしろいとし、貴しとした。

それは利休に一いち毫ごうのウソもなくて、利休の佳とし、おもしろいとし、貴しとした物は、真に佳なるもの、真におもしろい物、真に貴い物であったからである。利休の指点したものは、それが塊かにいぜん然たる一陶器であつても一度その指点をたす経るや金玉ただならざる物となつたのである。勿論利休をたす幫けて当時の趣味の世界を進歩させた諸星の働きもあつたには相違ないが、一代の宗匠として

利休は恐ろしき威力を有して、諸星を引率し、世間をして追隨させたのである。それは利休のウソのない、秀靈の趣味感から成立ったことで、何らその間にイヤな事もない、利休が佳とし面白しとし貴しとした物は、長えに真に佳であり面白くあり貴くある物であるのであるが、しかしまた一面には当時の最高有力者たる秀吉が利休を用い利休を尊み利休を殆んど神聖なるものとしたのが利休背後の大光は争つて利休の貴しとした物を貴しとした。これを得る喜悅、これを得る高慢のために高慢税を納めることを敢てしたのである、その高慢税の額は間接に皆利休の査定するところであつたのである。自身はそんな卑役を取るつもりはなかつたろうが、自然の勢で自分も知らぬ間に何時かそういう役廻りをさ

せられるようになっていたのである。骨董が黄金何枚何十枚、一郡一城、あるいは血みどろの悪戦の功労とも匹敵するようなことになった。換言すれば骨董は一種の不換紙幣のようなものになったので、そしてその不換紙幣の発行者は利休という訳になったよ
うなものである。西郷さいこうが出したり大隈おおくまが出したりした不換紙幣は直しきに価値が低くなったが、利休の出した不換紙幣はその後何百年を経てなおその価値を保っている。さすがは秀吉はエライ人間をつかまえて不換紙幣発行者としたもので、そして利休はまたホントに無慾でしかも煉金術を真まに能くした神仙であつたのである。不換紙幣は当時どれほど世の中の調節あずかに与つて靈力があつたか知れぬ。その利を受けた者は勿論利休ではない、秀吉であつた。

秀吉は恐ろしい男で、神仙を駆使してわが用を為さしめたのである。さて祭りが済めば芻狗すうくは不要だ。よい加減に不換紙幣が流通した時、不換紙幣発行は打切られ、利休は詰らぬ理屈を付けられて殺されて終しまった。後から後からと際限なく発行されるのではないから、不換紙幣は長くその価値を保った。各大名や有福町人の蔵の中に収まりかえていた。考えて見れば黄金や宝石だって人生に取って真価値があるのではない、やはり一種の手形じやまなのであろう。徹底して覷ずれば骨董も黄金も宝石も兌換券も不換紙幣も似たり寄ったりで、承知されて通用すれば樹の葉が小判でも不思議はないのだ。骨董の佳よい物おもしろい物の方が大判やダイヤモンドよりも佳くもあり面白くもあるから、金貨や兌換券

で高慢税をウンと払って、くすり釉の工合の妙味言うべからざる茶碗なりちやいれ茶入なり、何によらず見処みどころのある骨董を、好きならば手にして楽しむ方が、ちやうたつ暢達した料簡というものだ。理屈に沈む秋のさびしき、よりも、理屈をぬけて春のおもしろ、の方が好きそうな訳だ。関西の大富豪で茶道好きだった人が、死ぬ間際に数万金で一茶器を手に入れて、幾時間たのしを楽んで死んでしまった。一時間は何千円に当った訳だ、なぞとそし譏る者があるが、それは譏る方がケチな根性で、一生理屈地獄でノタウチ廻るよりほかの能のない、理屈をぬけた楽しい天地のあることを知らぬからの論だ。趣味の前には百万両だって煙草たばこの煙よりも果敢はかないものにしか思えぬことを会得しないからだ。

骨董はどう考えてもいろいろの意味で悪いものではない。特に
 年寄になつたり金持になつたりしたものには、骨董でも捻ひねくつて
 もらつてゐるのが何より好い。不老若返り薬などを年寄に用いて
 もらつて、若い者の邪魔をさせるなどは悪い洒落しやれだ。老人には老
 人相応のオモチャを当あてがつて、落おちついて隅の方で高慢の顔をさせ
 て置く方が、天下泰平の御祈ごきとう禱になる。小供はセルロイドの玩おもち
 器やを持つ、年寄は樂らく焼やきの玩おもち器やを持つ、と小学読本とくほんに書い
 て置いても差さしつかえ支さない位だ。また金持はとかくに金が余つて気
 の毒な運命とらに囚とらえられてるものだから、六朝りくちよう仏ぶつ印度いんど仏ぶつぐら
 いでは濟度とくどされなない故、夏殷かいん周しゆうの頃の大古物、姐だつき己ぎの金かな盃だらい
 に狐の毛が三本着はいてゐるののだの、伊尹いゐんの使しつた料理鍋、禹うの穿は

いたカナカンジキだのというようなものを素敵に高く買わすべきで、これはこれ有無相通、世間の不公平を除き、社会主義者だの無産者だのというむずかしい神の神慮をすずしめ奉る御神樂の一座にも相成る訳だ。

が、それはそれでよいとして、年寄でもなく、二才にさいでもなく、

金持でもなく、文無しでもない、いわゆる中年中産階級の者でも

骨董を好かぬとは限らない。こういう連中は全く盲人めくらというでも

なく、さればといて高慢税を進んで沢山納め奉るほどの金も意

気もないので、得て中え有ちゆうに迷った亡者のようになる。ところが

書画骨董に心を寄せたり手を出したりする者の大多数はこの連中

で、仕方がないからこの連中の内で聡明でもあり善良やかでもある輩から

は、高級骨董の素晴らしい物に手を掛けたくない事はないが、それは雲に梯かけはしの及ばぬ恋路みたようなものだから、やはり自分らの身分相応の中流どころの骨董で楽しむことになる。一番聡明善良なるものは分科的専門的にして、自分の関係しようとする範囲をなるべく狭小にし、そして歳月をその中で楽しむ。いわゆる一筋を通し、一流れを守つて、画えなら画で何派の誰を中心にしたところとか、陶器なら陶器で何なにがま窯いの何時頃とか、書なら書で儒者の誰とか、蒔絵まきえなら蒔絵で極古ごくいところとか近いところとか、というように心を寄せ手を掛ける。この「筋の通つた蒐集研究をする」これは最も賢明で本当の仕方であるから、相応に月謝さえ払えば立派に眼も明き味も解つて来て、間ま違ちがなく、最も無難に清せ

娯いじを得る訳だから論はない。しかるにまた大多数の人 はそれで
 は律義りちぎ過ぎて面白くないから、コケが東西南北の水みず 転てんにあたる
 ように、雪せつ 舟しゅう くさいものにも眼を遣やれば応おう 挙きよ くさいものに
 も手を出す、歌うた 磨まろ がかつたものにも色気を出す、大雅堂や竹ち
くてん 田た ばたけにも鋏くわを入れたがる、運が好ければ韓幹かんかんの馬でも百
 円位で買おう気でおり、支那の笑しょう 話わにある通り、杜荀鶴とじゆんかくの鶴
 の画なんという変なものをも買わぬと限いきらぬ勢おいで、それでも画の
 みならまだしもの事、彫刻でも漆器でも陶器でも武器でも茶器で
 もというように気が多い。そういう人 は甚はなだ少はくないが、時に
 気の毒な目を見るのもそういう人で、悪気はなくとも少し慾よく 気け
 が手伝っていると、百貨店で品物を買ったような訳ではない目に

も自業自得で出会うのである。中には些性が悪くて、骨董商の鼻毛を抜いていわゆる掘出物ほりだしものをする気になつてゐる者もある。骨董商はちよつと取片とりかたづ付けて澄ましてゐるものだが、それだつて何も慈善事業で店を開いてゐる訳ではない、その道に年期を入れて資本を入れて、それで妻子を過すごしてゐるのだから、三十円のものは口こうせん銭や経費に二十円遣やつて五十円で買うつもりでいれば何の間違まちがひはないものを、五十円のを三十円で買う気になつてゐては世の中がスラリとは行かない。五円のを三十円で売附けられるようなことも、罷り間違まかえば出来ることになる道理だ。それを弥いが上にもアコギな掘出しぎ気で、三円五十銭で乾山けんざんの皿を買おうなんぞという図 《ずうずう》しい料簡を腹の底に持つ

ていたとて、何の、乾也けんやだつて手に入る訳はありはしない。勸業債券は一枚買つて千円も二千円もになる事はあつても、掘出しなるといふことは先まづもつて以てなかるべきことだ。悪あく性しやうの料簡だ、劣等の心得だ、そして暗愚の意図というものだ。しかるに骨董いじりをする、骨董には必ずどれほどのあたいいの価があり金銭觀念が伴うので、知らず識しらずに賤いやしくなかつた人も掘出し気になる気味のあるものである。これは骨董のイヤな箇条の一つになる。

掘出し物という言葉は元来が忌いまわしい言葉で、最初は土中冢どちゆうち ようちゆう中ちゆうなどから掘出した物ということに違いない。悪い奴が棒一本か鋏くわ一挺ちようで、墓など掘つて結構なものを得る、それが既に掘出物で、怪しからぬ次第だ。伐墓ばつぼという語は支那には古い言葉で、

昔から無法者が貴人などの墓を掘った。今存している さんりやく 三略は

ちようりよう 張良

の墓を掘って彼が こうせきこう 黄石公から頂戴したものをアツプし

たという伝説だが、三略はそうして世に出たものではない。全く

偽物だ。しかし古い立派な人の墓を掘ることは行われた事で、明 みん

の天子の墓を悪僧が掘って種 あしげ の貴い物を奪い、おまけに骸骨を

足蹴にしたので罰 ばち が当って脚 きやくしつ 疾になり、その事遂に発覚する

に至った読むさえ忌わしい談 はなし は雑書に見えている。発掘さるるを

厭 いと っ そうそう 曹操は多くの偽塚 にせづか を造って置いたなどということは、

近頃の考証でそうではないと分明したが、王安石 おうあんせき などさえ偽塚

の伝説を信じて詩を作ったりしていたところを見ると、伐墓の事

は随分めずらしいことではなかったことが思われる。支那の古俗で

は、身分のある死者の口中には玉を含ませて葬ほうむることもあるのだから、酷ひどい奴は冢中の宝物ほうもつから、骸骨の口の中の玉まで引ひぱり出して奪あうことも敢あえてしようとしたこともある。飛とんでもないことをする者があつて、先年西の方の某国で或る貴い埜えいいき域を犯した事件というのが伝えられた。聞くさえ忌わしいことだが、掘出し物という語は無む論ろんこういう事に本もとづいて出来た語だから、いやしくも普通人的感情を有している者の使うべきでも思おもうべきでもない語であり事である。それにも関わらず掘出し物根性の者が多く、蚤のみと取り眼まなこ、熊鷹目くまたかめで、内心大掘出しをしたがつている。人が少し悪い代りに虫おおいが大おおいに好はい談なしである。そういう人間が多いから商売が險悪になつて、西の方で出来たイカサマ物を東の方の

田舎へ埋めて置いて、掘出し党に好い掘出しをしたつもりで悦ばせて、そして釣鉤つりばりへ引掛けるなどという者も出て来る。京都出で来のものを朝鮮へ埋めて置いて、掘出させた顔で、チャンと釣るなぞというケレン商売も始まるのである。もし真に掘出しをする者があれば、それは無頼澆皮ぶらいはつ皮の徒でなければならぬ。またその掘出物を安く買つて高く売り、その間かんに利を得る者があれば、それは即ち営業税を払っている商売人でなければならぬ。商売人は年期を入れ資本を入れ、海千山千の苦勞を積んでいるのである。毎日 真劍勝負をするような気になつて、良い物、悪い物、二番手、三番手、いずれ結構じょうじょう上じょうの物は少い世の中に、一眼見みそこ損なえば痛手を負わねばならぬ瀬に立つて、いろいろさまさまあ

らゆる骨董相応の値ぶみを間違わず付けて、そして何がしかの口
 銭を得ようとするのが商売の正しい心こころ掛かけである。どうして油
 断すきも隙すきもなりはしない。波の中に舟を操っているようなものであ
 る。波瀾重畳はらんちようじようがこの商買の常である。そこへ素人しろうとが割込ん
 だとして何が出来よう。今この波瀾重畳危険な骨董世界の有様を想そ
 見うけんするに足りる談はなしをちよつと示そう。但しいづれも自分が仮設かせつ
 したのでない、出処しゅつしよはあるのである。いわゆる「出で」は判はつき
 然りしているので、御所望ならば御明かし申して宜よろしいのです。
 ハハハ。

これは二百年近く古い書に見えている談はなしである。京都は堀川ほりかわ
 に金八きんぱちという聞えた道具屋があつた。この金八が若い時の事で、

親父にも仕込まれ、自分も心の励みの功を積んだので、大分に眼が利いて来て、自分ではもう内 《ないない》、仲間の者にもヒケは取らない、立派な一人前の男になったつもりでいる。實際また何から何までに渡って、随分に目も届けば気も働いて、もう親父から店を譲られても、取りしきつて一人で遣やつて行かれるほどになつていたのである。しかし何家どこの老としより人も同じ事で、親父はその老成の大事取りの心から、かつはあり余る親切の気味から、まだまだ位に思つていた事であろう、依然として金八の背後うしろに立つて保護していた。

金八が或時大おおさか阪くだへ下つた。その途中深ふかくさ草を通ると、道に一軒の古道具屋があつた。そこは商買の事で、ちよつと一眼見渡す

と、時代蒔絵じだいまきえの結構な鍔あぶみがチラリと眼についた。ハテ好い鍔だな、と立留つて視ると、如何にも時代といい、出来といい、なかなかめつたにはない好いものだが、残念なことには一方しかなかつた。揃つていれば、勿論こんな店にあるべきものではないはずだが、それにしても何程いくらというだろうと、価あたいを聞くと、ほんの端はしたがね金きんだつた。アア、一対いっついなら、おれの腕で売れば慥たしかに三十両にはなるものだが、片方では仕方がない、少しの金にせよ売物にならぬものを買ったつてどうもならぬと、何ともいえないその鍔の好い味に心は惹ひかれながら、振返つては見つとも思い捨てて買わずに大阪へと下つた。いくら好い物でも商売にならぬものを買わなかつたところはさすがに宜かつた。ところが、それから道の程を経

て、京橋^{きょうばし}辺^{へん}の道具屋に行く、偶然といおうか天の引合せといおうか、たしかに前の鍙と同じ鍙が片方あつた。ン、これが別れ別れて両方^{ごけ}後家になつていたのだナ、しめた、これを買つて、深草のを買つて、両方合わせれば三十両、と早くも腹の中で笑^{えみ}を含んで、価を問うと片方の割合には高いことをいつて、これほどの物は片方にせよ稀有^{けう}のものだからと、なかなか廉^{やす}くない。仕方がないから割に高いけれども、腹の中に目的があるので、先方のいい値^ねで買つて、わが家へ帰ると直^{すぐ}にこの話をした、勿論親父に悦ばれるつもりであつた。すると親父は悦ぶどころか大^{おお}怒^{おこ}りで、「たわけづらめ、慾^せに気が急^せいて、鍙の左右にも心を附けずにおつたナ」と罵^{のし}られた。金八も馬鹿じゃなかつた。ハツと気が

付いて、「しまった。向きようこう後ご気きをつけます、御免なさいまし」と叩おしぎ頭づかしたが、それから「片かたあぶみ鐙あだなの金八」という渾名あだなを付けられたということである。これは、もとより片方しかなかった鐙を、深草で値を付けさせて置いて、捷ちかみち徑ちのまわり道をして同じその鐙を京橋の他の店へ埋めて置いて金八に掘出させたのだ。心さえ急かねば謀はかられる訳はないが、他人にして遣やられぬ前まへにということ、なまじ前に熟じゆくし視しして、テツキリ同じ物だと思つた心の虚きよというものの二ツから、金八ほどの者も右左を調べることを忘れて、一いっぱい盃ばい食あわせられたのである。親父はさすがに老功で、後家の鐙を買かいあわ合あせて大きい利を得る、そんな甘うまい事があるものではないということに勘かんを付けて、直すぐに右左の調べに及ばな

つたナと、紙燭ししよくをさし出して慾心の黒闇くらやみを破ったところは親父だけあつたのである。勿論深草を尋ねても鎧はなくなつて、片鎧うきなの浮名だけが金八の利得になつたのである。昔と今とは違うが、今だつて信州と名古屋とか、東京と北京ペキンとかの間でこの手で謀られたなら、慾氣満 《よくけまんまん》の者は一服頂戴せぬとは限るまい。片鎧の金八はちよつとおもしろい談だはなし。

も一ツ古い談はなしをしようか、これは明末みんまつの人の雑筆に出ているので、その大分に複雑で、そしてその談中に出て来る骨董好きの人や骨董屋の種しゅの性格一風には名高い人もあり、勿論虚構の談ではないと考えられるのである。

定窯ていようといえは少し骨董好きの人なら誰でも知っている貴い陶

器だ。宋そうの時代に定てい州しゅうで出来たものだから定窯ていぎょうといふのである。詳しく言えばその中にも南定なんていと北定ほくていとあつて、南定といふのは宋が金きんに逐おわれて南渡なんとしてからのもので、勿論その前の北ほ宋そうの時、美術天子の徽宗皇帝の政和宣和頃せいわせんな、即ち西暦千百年頃から二十何年頃までの間に出来た北定の方が貴いのである。また、新定しんていというものがあるが、それは下くだつて元の頃げんに出来たもので、ほんとの定窯ではない。北定の本色は白で、白の※水ゆうすいの加わった工合に、何ともいへぬ面白い味が出て、さほどに大したものでなくてさえ人を引付ける。

ところが、ここに一つの定窯の宝鼎ほうていがあつた。それは鼎かなえのことであるからけだし当時宮庭へでも納めたものであつたらう、精

中の精、美中の美で、実に驚くべき神品であった。はじめ明の成
 化弘治の頃、朱陽の孫氏が曲水山房に蔵していた。曲水
 山房主人孫氏は大富豪で、そして風雅人鑑賞家として知られた孫
 七峯とつづき合で、七峯は当時の名士であつた楊文襄、文
 太史、祝京兆、唐解元、李西涯等と朋友で、七峯
 のいたところの南山で、正徳十五年七峯が蘭亭の古のよう
 に修禊の会をした時は、唐六如が図をつくり、兼ねて長歌
 を題した位で、孫氏は単に大富豪だつたばかりでなかつたので
 ある。そこでその定窯の鼎の台座には、友人だつた李西涯が篆
 書で銘を書いて、鐫りつけた。李西涯の銘だけでも、今日は勿
 論の事、当時でも珍重したものであつたらう。そういうスバラし

い鼎だったのである。

ところが嘉靖かせい年間に倭寇わこうに荒されて、大富豪だけに孫氏は種
の点で損害を蒙こうむつて、次第に家運が傾いた。で、蓄えていた
ところの珍貴な品を段と手放すようになった。鼎は遂けいこに京
口の《しゅうこうさくさく》としていい伝え聞伝えて羨せん涎せん
を垂れるところのものであつた。

ここに呉門ごもんの周丹泉しゅうたんせんという人があつた。心慧思靈しんけいしれいの非常
の英物で、美術骨董にかけては先ず天才的の眼も手も有していた
人であつたが、或時金きんから舟ふねに乗り、江右かうゆうに往く、道に
毘陵びりやうを経て、唐太常に拜謁を請い、そして天下有名の彼の定鼎か
の一覽もとを需めた。丹泉の俗物でないことを知つて交まじわつていた唐氏

は喜んで引見して、そしてその需もとめに応じた。丹泉はしきりに称讚してその鼎をためつすがめつ熟視し、手をもつて大おおさを度はかつたり、ふところ紙に鼎の紋様を模うつしたりして、こういう奇品に面した眼がん福んぷくを喜び謝したりして帰った。そしてまた舟を出して自分の旅路のぼに上つてしまった。

それから半はんとし歳余り経た頃、また周丹泉が唐太常をおとずれた。そして丹泉は意気安閑として、過ぐる日の礼を述べた後、「御秘藏のと同じような白定鼎をそれがしも手に入れました」といった。唐太常は吃驚びっくりした。天下一品と誇っていたものが他所よそにもあつたというのだからである。で、「それならばその品を視せて下さい」というと、丹泉は携えて来ていたのであるから、異議なく視

せた。唐は手に取つて視ると、大きさから、重さから、骨質から、
ゆうしよく釉色ゆうしよくの工合から、全くわが家のものと寸分違たがわなかつた。そ
 こで早速自分の所有のを出して見競みくらべて視ると、兄弟か 《りよ
 うりよう》と会得あひえしました。そこで実は倣ならつてこれを造りました
 ので、あり体ていに申します、貴台あざむを欺あざむくようなことは致いたしませぬ」
 といった。丹泉つねづねは元来毎つねづね江西こうせいの景德鎮けいとくちんへ行つては、古代
 の窯器の佳品の模製を良工に指図しては作らせて、そしていわゆ
 る掘出し好きや、比較的低い錢で高い物を買おうとする慾張りや、
 訳も分らぬくせに金錢かねづくで貴い物を得ようとする耳食じしよく者流しやりゆう
 の目をまわさせていたもので、その製作は款紋かんもん色しき沢たく、すべて
 咄 《とつとつ》として真せまに逼せまつたものであつたのである。恐ろ

しい人もあつたもので、明の頃に既にこういう人があつたのであるから、今日でもこの人の造らせた模品が北定窯だの何だのといつて何処かの家に什襲珍蔵されていぬとは限るまい。さて、周の談を聞いて太常はまた今更に歎服した。で、「それならばこの新鼎は自分に御譲りを願う、真品と共に秘蔵して永く副品としますから」というので、四十金を贈つたということである。無論丹泉はその後また同じ品を造りはしなかつたのであろう。

この談だけでもかなり骨董好きは教えられるところがあろうが、談はまだ続くのである。それから年月を経て、万暦の末年頃、淮安に杜九如というものがあつた。これは商人で、大身上で、素敵な物を買出すので名を得ていた。千金を惜まらずして

奇玩きがんをこれ購あがなうので、董元宰とうげんさいの旧蔵の漢玉かんぎよく章しょう、劉海りゆうかいの旧蔵の商金鼎しょうきんていなんというものも、皆杜九如の手に落ちた位である。この杜九如が唐太常の家にある定鼎の尊を聞いていて、かねがねどうかして手に入れたいものだと覗うかがっていた。太常の家は孫の代になって、君兪くんゆというものが当主であつた。君兪は名家に生れて、氣位きぐらいも高く、かつ豪華で交際を好む人であつたので、九如は大金を齎もたらして君兪のために寿じゆを為し、是非ともどうか名高い定鼎を拝見して、生せい平へいの渴望を慰いしたいと申もう出しだした。君兪は金かねで面つらを撲はるような九如を余り好みもせず、かつ自分の家柄からして下眼に視たことでもあろう、ウン御覽に入れましようといつて半分冗談に、真鼎は深蔵したまま、彼かの周丹泉が

かれたのが真物ではないからである。君兪は最初は氣位の高いところから、町人の腹ツぷくれなんぞ何だという位のことと贗物を真顔まがおで視せたのであるが、元來が人の悪い人でも何でもなく温厚の人なので、欺いたようになったまま濟ませて置くことは出来ぬと思つた。そこで門下の士を遣つて、九如に告げさせた。「君が取つて行つたものは実は贗品である。真の定鼎はまだ此方このほうに蔵してあるので、それは太常公の戒いましめに遵したがつて軽 《かろがる》しく人に示さぬことになつているから御視おみせ申さなかつたのである。しかるに君が既に千金を捐すつて贗品を有もつていてということになると、君は知らなくても自分は心に愧はじぬという訳にはゆかぬではないか。どうかあの鼎を還かえして下さい、千金は無論御返しする

から」と理解させたのである。ところが世間に得てあるところの例で、品物を売る前には金かねが貴く思えて品物を手放すが、品物を手放してしまうとその物のないのが淋しくなり、それに未練が出て取返したくなるものである。杜九如の方ではテツキリそれだと思つたから、贖物だつたなぞというのは口実だと考えて、約束へん改んがいをしたいのが本心だと見た。そこで、「どういたしまして。

あの様な贖物があるものではございますまい。仮令たとひ贖物にしましたところで、手前の方では結構でございます、頂戴致して置きまして後悔はございません」とやり返した。「そんなにこちらの言葉ことばを御信用がないならば、二つの鼎なべを列ならべて御覧ごらんになつたらば如何いかです」と一方はいつたが、それでも一方は信疑相あいな半なかして、

「当方はどうしても頂戴して置きます」と意地張った。そこで唐君愈は遂に真鼎を出して、贗鼎に比べて視せた。双方とも立派なものではあるが、比べて視ると、神彩靈威しんさいいれい、もとより真物は世間に二ツとあるべきでないところを見わした。しかし杜九如も前言の手前、如何どうともしようとはいわなかつた。つまり模品もひんだということを承知しただけに止まつて、返しはしなかつた。九如のその時の心の中は傍うちからはなかなか面白く感ぜられるが、当人に取つては随分変なものであつたらう。しかしこの委曲を世間が知ろうはずはない、九如の家には千金に易かえた宝鼎が伝わつたのである。九如は老死して、その子がこれを伝えて有もつていた。

王廷おうてい 瑀いげ 字は越石えつせき という者があつた。これは片かた 鐙あぶみ を金八

に売りつけたような性質の良くない骨董屋であった。この男が杜九如の家に大した定鼎のあることを知っていた。九如の子は放蕩ものであったので、花柳かりゆうの巷ちまたに大金を捨てて、家も段に悪く
なつた。そこへ付つけ込んで廷瑤は杜生とせいに八百金を提供して、そして
「御返金にならない場合でも御宅の窯鼎ようていさえ御渡し下されれば」
ということをいって置いた。杜生はお坊さんで、廷瑤の謀はかつた通
りになり、鼎は廷瑤の手に落ちてしまつた。廷瑤は大喜びで、天
下一品、価値万金ばんきんなどと大法螺おほぼらを吹立ふきたて、かねて好事こうずで鳴つ
ている徐六岳じよりくがくという大紳たいしんに売付けにかかつた。徐六岳を最初
から廷瑤は好い鳥だと狙つていたのであろう。ところが徐はあま
り廷瑤が狡譎こうきつなのを悪にくんで、横を向いてしまつた。廷瑤はアテ

がはずれて困ったが仕方がなかった。もとよりヤリクリをして、
 狡こすから辛く世を送っているものだから、嵌はめ込む目的あてがない時は質しち
 に入れたり、色気の見える客が出た時は急に質受けしたり、十余
 年の間というものは、まるで碁ごを打つようなカラクリをしていた
 その間に、同じような族類系統の肖にたものをいろいろ求めて、ど
 うかして甘い汁あまを啜すすろうとしていた。その中うちに泰興たいこうの季因きいん是と
 いう、相当の位地のある者が廷瑀ひつに引かかった。

季因是もかねて唐家の定窯鼎の事を耳にしていた。勿論見た事
 もなければ、詳しい談はなしを聞いていたのでもない。ただその名に憧
 れて、大した名物だということを知っていたに過ぎない。廷瑀は
 因是の甘いお客だということを見抜いて、「これがその宝器でござ

ございました、これこれの訳で出たものでございませう」と宜いい加減な伝来のいきさつを談はなして、一つの窯鼎はなを売りつけた。それも自分が杜生から得た物を売ったのならまだしもであつて、贗鼎にせよ周丹泉の立派な模品であるから宜いが、似ても似つかぬ物で、しかも形ことさえ異ことつてゐる方鼎ほうていであつた。しかし季因是はまるで知らなかつたのだから、廷瑀の言に瞞まん着ちやくされて、大名物を得る悦びに五百金という高慢税を払つて、大ニコニコでいた。

しかるに毘陵びりようの趙再思ちようさいしという者が、偶然泰興を過ぎたので、知しり合あであつたから季因是の家をおとずれた。毘陵は即ち唐家のあるところの地で、同じ毘陵の者であるから、趙再思も唐家に遊んだこともあつて、彼かの大名物の定鼎を見たこともあつたのであ

る。その毘陵の人が来たので、季因是は おおてんぐ 大天狗で、「近ごろ大した物を手に入れましたが、それは乃ち すなわ 唐氏の旧蔵の名物で、わざとにも ごひようかん 御評鑒を得たいと思っておりましたところを、ちようど 丁度御光来を得ましたのは誠に仕合せで」という はなし 談だ。趙再思はただハイハイといっている、季は重ねて、「唐家の定窯の方鼎は、君もかつて御覧になったことが おあ 御有りですか」といった。そこで趙は こち 堪えかねて笑い出して、「何と おっし 仰あります、唐氏の定鼎は方鼎では ござ ございませぬ、えんてい 円鼎で、足は三つで、方鼎と おっし 仰あるが、それは何で」と答えた。季因是はこれを聴くと ふっぜん 怫然として奥へ入ってしまった。久しく出て来なかつた。趙再思は仕方なしに ま 俟っている、くれがた 暮方になって ようや 漸く季は出て来て、よど 余怒なお色にある

ばかりで、「自分に方鼎を売付けた王廷瑀という奴めは人を馬鹿にした憎い奴、南科なんかの屈静源くつせいげんは自分が取立てたのですから、今書面を静源に遣つかわしました。静源は自分のためにこの一いち埒ちらつを明けてくれましよう」ということであつた。果して屈静源は有司ゆうしに属して追理ついでりしようとしたから、王廷瑀は大しくじりで、一目散に姿を匿かくしてしまつて、人をたのんで詫わびを入れ、別に偽物などを贈つて、やつと牢獄ろうやへ打込まれるのを免まぬれた。

はなし

談はこれだけで済んでも、かなり可笑味おかしみもあり憎味もあつて沢

山なのであるが、まだ続くからいよいよ変なものだ。廷瑀の知合に黄こう石こうせき、名は正寶せいひんというものがあつた。廷瑀と同じ徽きし州ゆうのもので、親類つづきだなどいつていたが、この男は搢紳しんしんの間に

も遊び、少しは鼎彝ていい書画の類をも蓄え、また少しは眼もあつて、本業というのではないが、半黒人はんくろうとで売ったり買ったりもしようという男だ。こういう男は随分世間にもあるもので、雅がのようด้วยで、俗のようでも物好ものずきでもあつて、愚のようでも伶俐りこうで、伶俐のようでも畢ひつきよう 竟は愚のようでもある。不才の才子である。この正寶はいつも廷瑀たがいと互たがいに所有の骨董を取易とりかえごとをしたり、売買うりかいの世話をしたりさせたりして、そして面白がつていた。この男が自分の倪雲林げいりんの山水さんすい一幅いぶく、すばらしい上出来なのを廷瑀に託して売ってもらおうとしていた。価は百二十金で、ちよつとはないほどのものだった。で、廷瑀の手へ託しては置いたが、金高かねだかなものでもあり、口が遠くて長くなる間に、どんな事が起らぬとも

限らぬと思つたので、そこでなかなかウツカリしておらぬ男なので、その幅の知れないところへ予じめ自分の花押を記して置いて、勿論廷瑀にもその事は秘しておつたのである。廷瑀はその雲林を見ると素敵に好いので、欲しくなつて堪らなかつた。で、上手な贋筆かきに頼んで、すっかりその通りの模本をこしらえさせた。正寶が取返しに來た時、米元章流の巧偷をやらかして、本の方を渡して知らん顔をきめようというのであつた。ところが先方にも荒神様が付いていない訳ではなくて、チャント隠し印のあることには気が付かなかつたのである。こういうイキサツだから何時まで経つても売れない。そこで正寶は召使の男を遣つて、雲林を取返して來いといひ付けた。隠し印のことは無論男に吞込

ませたのである。この男の王おうぶつげん仏元ぶつげんというのも、平常主人いづもらの五分ぶもすかさないとところを見聞みききして知っているので、なかなか賢くなっている奴だった。で、仏元は廷瑯ていろうのところへ往つて、雲林を返して下さいというのと、廷瑯は承知して一幅を返した。一幅は何も彼も異かつてはいなかつた。しかし仏元は隠しじるしのあり処どころについてその有無を査しらべた。不思議や主人の花押は影も形もなかつた。ないはずである、廷瑯が今渡したものは正まさしく品なのであるもの。

仏元はさてこそと腹の中でニヤリと笑つた。ところでこの男がまた真劍しらはど白刃取りはつしよを奉書ほうしよの紙一枚で遣付けやりつようという男だったから、これは怪しからん、模本贋物を御渡しになるとは、と真正

面からこちらの理屈の木刀を揮ふるつて先方の毒悪の真劍と切結ぶよ
うな不利なことをする者ではなかった。何でもない顔をして模本
の雲林を受取った。敵の真劍を受留めはしないで、澄まして体たいを
交かわして危あぶなげ氣のないところに身を置いたのである。そしてこう
いうことを言った。「主人はただ私わたくしに画を頂戴して参れとばかり
ではなく、こちらの定窯鼎をお預かり致してまいれ、御直段おねだんの事
はいずれ御相談致しますとということだ」といった。定窯の売れ口
がありそうな談はなしである。そこで廷瑀は悦んで例の鼎を出して仏元
に渡した。廷瑀は仏元に、より長い真劍を渡して終しまったのである。
そこへ正寶は遣やつて来た。そして画を検査してから、「售うれない
なら售れないで、原物を返してくれるべきに、狡こすいことをして

は困る」というと、「飛んでもない、正しくこれは原物で」と廷
瑠はいい張る。「イヤ、そうは脱けさせない。自分は隠しじるし
をして置いた、それが今何処どこにある。ソナナ甘い手あまを食わせられ
る自分じゃない」という。「そりやいい掛りがというもので、原物
を返せば論はないはずだ」という。双方負けず劣らず遣合やりあつて、
チャンチャンバラと鬨つたが、仏元は左右の指を鼎の耳へかけて、
この鼎を還すまじいさまをしていた。論に勝つても鼎を取られて
は詰らぬと氣のついた廷瑠は、スキを見て鼎を奪うば取ろうとした
が、耳をしつかり持つていたのであったから、巧うまくは奪えなかつた。
耳は折れる、鼎は地に墜おちる。カチャンという音一ツで、千万金
にもと思つていたものは粉碎してしまつた。ハツと思うと憤恨一

時に爆裂した廷瑀は、夢中になつて当面の敵の正賓にウンと頭撞づつきを食わせた。正賓は肋あばらを傷けられきずつて卒倒し、一場いちじょうは無茶苦茶になつた。

元来正賓は近年逆境におり、かつまた不如意ふによいで、惜しい雲林さえ放そうとしていた位のところへ、廷瑀の侮あなどりに遭い、物は取上げられ、肋は傷けられたので、鬱悶うつもん苦痛一時せまに逼り、越えつ夕せきして終ついに死んでしまった。廷瑀も人命沙汰ざたになつたので土地にはいられないから、出発して跡を杭州こうしゅうにくりました。周丹泉の造つた模品はこれで土に返つた訳である。

談はなしはもうこれで沢山であるのに、まだ続くから罪が深い。廷瑀が前に定窯の鼎類数種を蒐あつめた中に、なお唐氏旧蔵の定鼎と号し

て大名物を以て人を欺くべきものがあつた。廷瑀は杭州に逃げたところ、当時潞王が杭州に寓しておられた。廷瑀は潞王の承奉兪啓雲という者に遇つて、贗鼎を出して示して、これが唐氏旧蔵の大名物と誇耀した。そして潞王に手引してもらつて、手取り千六百元、四百金を承奉に贈ることにして、二千金で売付けた。時はもう明末にかかり、万事不束で、人も満足なものもなかつたので、一厨役の少し麁鹵なものにその鼎を蔵した管傘を扱わせたので、その男があやまってその贗鼎の一足を折つてしまった。で、その男は罪を懼れて身を投げて死んで終つた。その頃大兵が杭州に入り来たつて、潞王は奔り、承奉は廢鼎を錢塘江に沈めてしまつたという。

これでこの一条の談は終りであるが、骨董というものに附随して随分種の現象が見られることは、ひとりこの談のみの事ではあるまい。骨董は好い、骨董はおもしろい。ただし願わくはスラリと大枚たいまいな高慢税を出して楽たのみたい。廷瑀や正賓のような者に誰しも関係したくは思うまい。それからまた、いくら詰らぬ人だつて、鼎の足を折つたために身を投げてもらつたりなぞしたくはあるまい。

(大正十五年十一月)

青空文庫情報

底本：「幻談・観画談 他三篇」岩波文庫、岩波書店

1990（平成2）年11月16日第1刷発行

1994（平成6）年5月15日第6刷発行

底本の親本：「露伴全集 第六巻」岩波書店

1953（昭和28）年12月刊

入力：土屋隆

校正：オーシャンズ3

2008年1月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

骨董

幸田露伴

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>